

# 学部専門教育と連動した地域課題対応型 サービス・ラーニングの試み

安藤淑子、佐藤文昭、前澤哲爾、吉田 均、熊谷隆一  
安達義通、澁谷彰久、張 兵、二宮浩輔、箕浦一哉

A study of local issue-oriented service-learning in conjunction  
with the professional education of the department

ANDO Yoshiko, SATO Fumiaki, MAEZAWA Tetsuji, YOSHIDA Hitoshi, KUMAGAI Takakazu  
ADACHI Yoshimichi, SIBUYA Akihisa, ZHANG Bing, NINOMIYA Kosuke, MINOURA Kazuya

## Abstract

Yamanashi Prefectural University International Policy Department is offering service-learning in conjunction with the professional education of the department.

Here we reported the framework and the implementation status of service-learning established to secure the quality as a professional education and examined the educational effect through the evaluations by students and teachers. And we revealed that students' various abilities including communication skills improved through practical activities and their knowledge gained in classroom lectures was fed back to their professional learning through its practice. This is how we revealed that service-learning plays a practical role in professional education as well as contributes to its advanced learning.

キーワード：サービス・ラーニング、高等教育、専門教育、カリキュラム、教育的効果

Key words: service-learning, higher education, professional education, curriculum, educational effect

## 1. はじめに

サービス・ラーニングとは、学校教育のカリキュラム上に位置づけられる体験型学習の一形態のことである。National Service-Learning Clearinghouseによると、サービス・ラーニングは次のように定義されている。

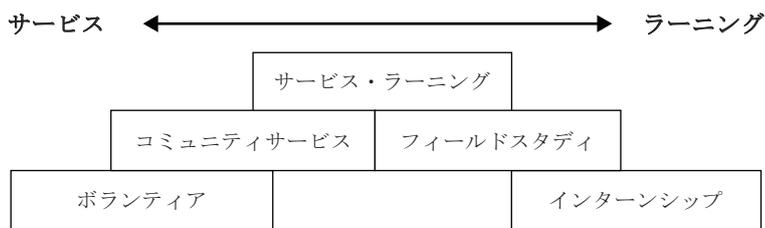
Service-learning is a teaching and learning strategy that integrates meaningful community service with instruction and reflection to enrich the experience, teach civic responsibility, and strengthen communities.

サービス・ラーニングとは、意味のある地域貢献活動と教育的な指導及び内省を統合した教育・学習のストラテジーのことである。豊

かな経験を積むこと、学習者の中に市民としての責任感を育成すること、地域社会との結びつきを強化することが、その目的である。

したがって、学生の地域におけるボランティア活動がそのままサービス・ラーニングとなるわけではなく、実施にあたっては「明確な学習目的、事前の計画的な準備、最終的なリフレクションに至る構造的な枠組みを持った経験学習」(Seifer & Connors, 2007) であらねばならない。言葉を換えれば、大学教育におけるサービス・ラーニングとは、コミュニティ・サービスとアカデミックな教科内容・スキルを統合するカリキュラム開発(倉本 2008) そのものを指しているのである。

同時に、サービス・ラーニングは、大学教育の



(佐々木 2003 p.159 より転載)

一部として行われる「課外活動」あるいは「実習」とも異なる位置づけにある。佐々木（2003）が示すように、サービス・ラーニングを構成する「サービス」の部分はあくまで社会的なものであり、何らかの形で地域社会に貢献するものである。

## 2. 本学におけるサービス・ラーニングの位置づけ

近年、大学におけるボランティア活動への関心が高まっており、国の教育政策においても大学生のボランティア活動の推進が要請されるという現状がある（津止・桜井 2009）。近年では、平成 24 年 3 月に中教審が質の高い学士課程教育のあるべき姿として、「事前の準備、授業の受講、事後の展開を通じた主体的な学びに要する総学修時間の確保が重要」であるとした上で、インターンシップやサービス・ラーニング等の体験型活動を挙げている。

このような現状を背景に、本学では平成 22 年度の準備期間を経て平成 23 年度、24 年度には学

部専門教育の一環としてサービス・ラーニングを実施した<sup>1)</sup>。本学におけるサービス・ラーニングの特色は、実施される学生の地域活動が大学の専門教育と密接な連関を有している点にある。

本学のサービス・ラーニングは、具体的には以下のような教育目標に基づいている。

- (1) 学生が専門教育における既習得知識を地域活動において実践的に活用する
- (2) 実践活動を通して得られた知見を基に知識の再構築を行う
- (3) 事後のリフレクションを通して専門的な学習へ発展的なフィードバックを行う

また、本学のサービス・ラーニングのもう一つの特徴として、地域課題の改善を目指した大学と地域の連携プロジェクトが、学生の地域活動として活用されているという点を挙げる事ができる<sup>2)</sup>。

こうしたプロジェクトの中には、教員と共に学生が活動の初期段階から加わり、主体的に運営に参加しているものがある。こうした形態のサービ

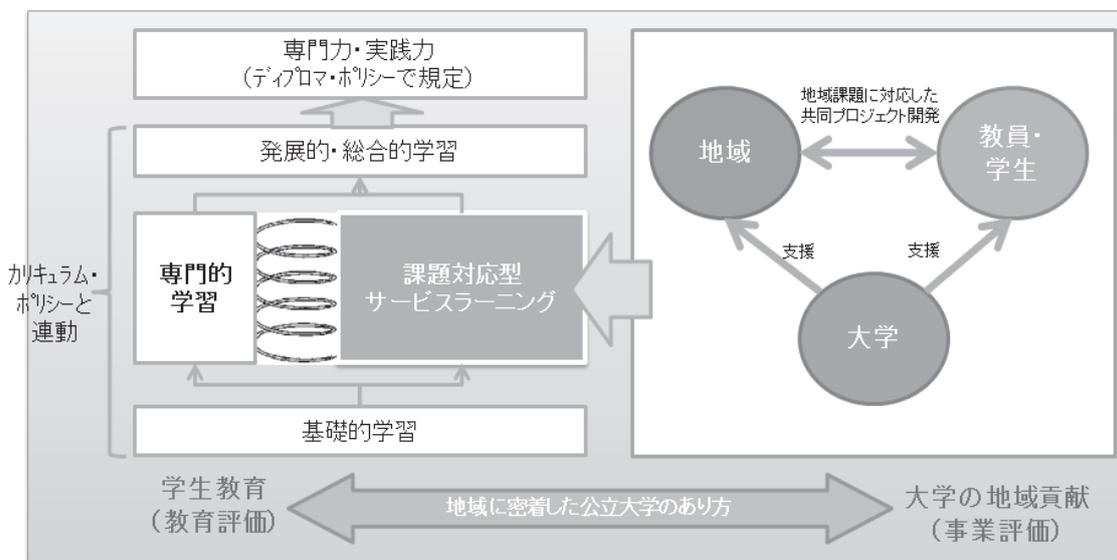


図1 大学学部の専門教育と地域貢献活動を繋ぐサービス・ラーニングの実施

ス・ラーニングは、地域のニーズや運営に関わる諸課題等に学生が直接的にコミットすることが可能である。また、既成の活動に参加するという形態に比べて、地域住民との協働という意識をより強く持つことができる点にもメリットがある。

以上のように、本学のサービス・ラーニングには学部専門教育の活性化という教育目的のほか、地域課題に対応した大学と地域の連携を促進するという点が重要な柱の一つになっている（図1参照）。

### 3. 実施の枠組み

#### 3-1 ガイドライン

平成22年度より準備段階を経て実施された平成23年度、24年度のサービス・ラーニングは、今後の学部カリキュラム化に向けた試行段階であり、演習授業或いは実践科目として多様な形態で実施されている。一方で、専門教育として統一的な教育目標を定め、活動全体の質を担保するために実施手順を含めた枠組み作り（以下、「ガイドライン」と称す）を行った。

サービス・ラーニングのガイドラインには、サービス・ラーニングを構成する三つの段階（準備段階、実施の段階、実施後の評価・リフレクションの段階）における、教員及び学生の活動の指針が次のように示されている。

まず、準備段階では以下の手続きが必要である。

- ①学習目標の明確化：本学のサービス・ラーニングの目的は、(甲)専門性の学びの深化、(乙)学生の社会性の涵養、(丙)学習意欲の醸成、の3点である。担当教員は、これを踏まえて活動ごとに具体的な教育目標を設定する。
- ②地域課題の明確化：教員は、サービス・ラーニングの活動計画を策定する際、活動を通じて改善を目指す具体的な地域課題を示す必要がある。
- ③活動計画の立案：前述の地域課題と学習目標を踏まえて、実施する活動の具

体的な計画案を学部サービス・ラーニング運営委員会に提出する。

上記の「活動計画」には、a) 対象年次（専門教育の一環として実施されるため参加対象となる年次は2年以上が望ましい）、b) 地域活動時間数（事前学習や成果発表などを除く地域活動の総時間数が20時間以上予定されていることを条件とする）、c) 地域活動の目的（活動が地域社会に対して波及する効果等について具体的に記入）、d) 教育目標（活動を通じて学生が達成すべき目標を具体的に記入）、e) 活動概要（活動内容、実施場所、活動日、時間帯など）、f) 成績評価（活動記録や成果物、学生によるリフレクション）、g) 概算事業費（概算活動費と主な用途を記入）が記入される。

なお、活動計画書の提出によって参加表明のあった活動は、サービス・ラーニング運営委員会の承認を経て実施される。

#### 3-2 実施方法

具体的な活動に先立って、教員は参加学生に対し活動に関するオリエンテーションを実施する。オリエンテーションでは、実施する地域活動の内容、目的とその意義を説明し、参加を希望する学生に対し、登録のためのエントリーシートに必要事項を記入させる。

その後の地域活動への参加にあたっては、基本的に学生の主体性を尊重する。活動の内容や状況に応じて、担当教員は適宜指導・助言を行う。活動のモニタリングについては、必要に応じて活動記録を作成させる（webによる活動記録は後述）。また、担当教員は、学生の活動状況をweb上の活動記録の閲覧や、ミーティング等を通して把握する。

#### 3-3 サービス・ラーニングの評価

活動実施後には、原則としてサービス・ラーニングに関する以下の3つの評価を行う。

- (1) 学生による活動自己評価：活動内容全体に関するリフレクション（活動目標の達成、活動によって獲得した知見などを含む）
- (2) 地域による活動の評価：今回の地域活動が地

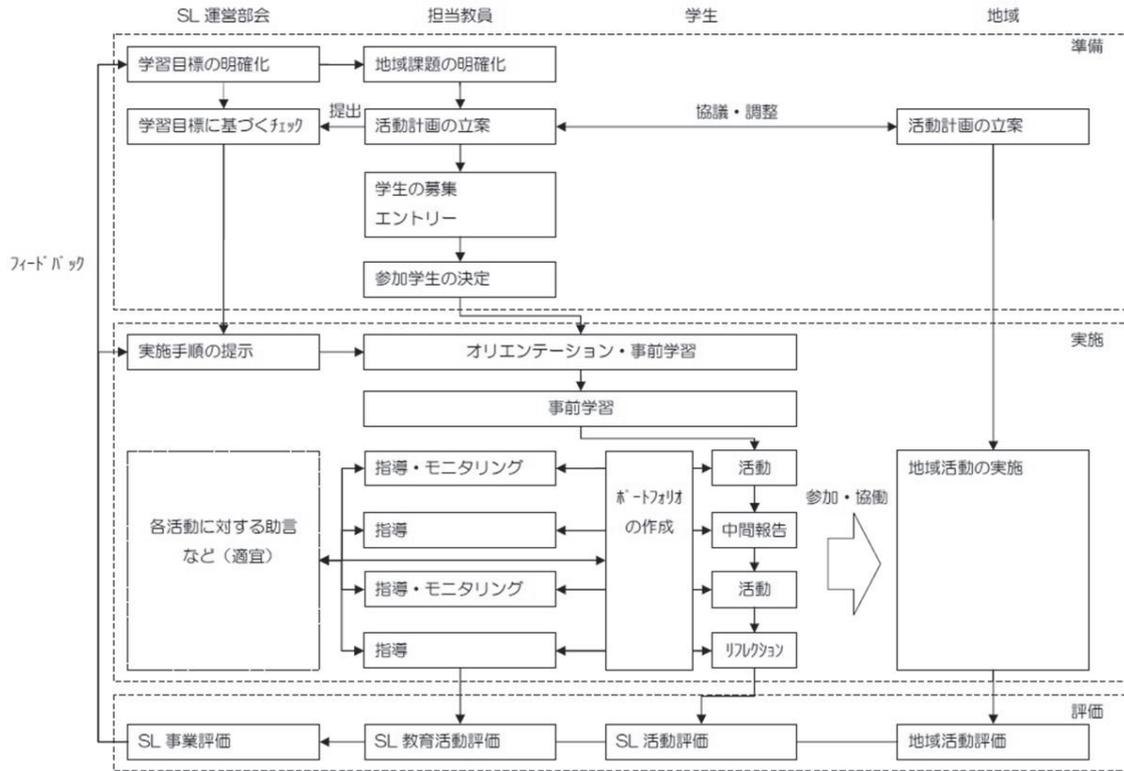


図2 サービス・ラーニング実施の手順



図3 WEB を活用したサービス・ラーニング運営図 (安藤 2011 より転載)

域ニーズに応えるものであったか

(3) 教員による活動評価：当初の目標の達成度、教育活動としての評価

また、これとは別に担当教員は学生の成績評価を行う。評価基準は、活動への参加状況及び最終日のリフレクション等の提出物による。

以上の流れを示したものが下図（図2）である。ガイドラインは今後の事業結果等を踏まえて、随時見直しを行っていく予定である。

### 3-4 Web上の活動管理について

平成23年度には、一部の活動についてWeb上で日常の活動記録を記入し、その内容を教員・学生間で共有するためのサイトを設けた（図3）。

教員及び学生は、事前に配布されたIDとパスワードによって活動別のサイトに入ることができる。サイトからは活動に関わる情報や各種シートのダウンロードが可能であり、また活動記録（ログ）を入力することができる。教員は学生のログ

を確認し、コメントを返したり必要に応じて指導を行うことができる。この試みは、サービス・ラーニングにおける地域活動が各所に分散し、或いは遠隔地に及ぶ場合の活動管理のために実施されたものである。

### 4. サービス・ラーニングの実施状況

以下では、サービス・ラーニングの実施状況と学生・教員・地域による評価を基に教育的効果を検証し、専門教育と連携したサービス・ラーニングの意義について考察を行う。

#### 4-1 平成23年度のサービス・ラーニング

平成23年度は、9名の教員による14の活動がサービス・ラーニングとして実施され、延べ128名の学生が活動に参加した。本学部は1学年80名の小規模な学部であり、学生の参加率は極めて高いと言えるだろう。

活動には、地域住民、自治体、行政機関、学校

表1 平成23年度に実施された活動内容

活動名	担当教員	活動内容	学生数
ITを活用した遠隔日本語教育	安藤 淑子	外国人学校と大学を繋いだ遠隔日本語教育の実施と、それに関する調査研究及び相互交流を行う。	7名 (1名)
学習支援教室	安藤 淑子	山梨県内の、日本語を母語としない児童生徒に対する日本語・教科学習支援教室を開催し学生が運営する。	23名 (3名)
日本語・日本文化講座	安藤 淑子	地域に在住する外国人を対象とした日本語・日本文化講座の開催に関わるプロジェクトに参加する。	4名 (2名)
やまなし映画祭プロジェクト	前澤 哲爾	甲府中心市街地で「やまなし映画祭」を開催し、映画文化の振興を図ることにより、地域活性化を図る。	10名
観光による地域振興に関する支援プロジェクト	吉田 均	地域の観光関連団体から寄せられた具体的な課題を解決するため、事業ごとにチームを作って活動する。WEBでの観光情報の発信、観光計画や調査、多言語メニューなど。	11名
やまなしエコジャーナルプロジェクト	箕浦 一哉	インターネット新聞「やまなしエコジャーナル」を発刊し、山梨における環境やまちづくりに関して取材・記事執筆・情報発信の活動をおこなう。	5名
大学キャラクタープロジェクト	前澤 哲爾	大学キャラクターを各種地域活動と連動させ、地域の活性化に寄与するとともに、情報発信の戦略を立て実践する。	12名
フットパス around 県立大	前澤 哲爾	地域でフットパスコースを作成し、小冊子を製作、ツアーを実施する。地域の魅力発信、新しいツーリズムを開発する。	8名
放送文化論実践	前澤 哲爾	山梨県内の地域情報を放送番組化し、放送すると共に、映像データベースとして保存する。	8名 (8名)
国際理解活動を通じた地域密着型の発展途上国支援	二宮 浩輔	地域と共に国際的な問題を考える機会を提供し、学生と地域が情報を共有する。	6名

外国人から見た山梨の魅力と課題	張 兵	①県立大生と山梨在住外国人との国際交流の促進 ②外国人の視点から見たやまなしの魅力と課題の把握	10名
地域振興機関紙「VISION」制作プロジェクト	安達 義通	地域活性化事業等を実施している地域の活動家・実践家等へのインタビュー等を基にパンフレットを作成し、得た情報を地域社会に還元する。	5名 (5名)
よつびし総研プロジェクト2011	熊谷 隆一	学生たちが主体となって、イベントや地域の調査研究活動を実施し、甲府中心街の活性化、ひいては山梨県全体の活性化に資する。	11名
地域金融犯罪予防活動(プロジェクトG)	澁谷 彰久	県立大生が山梨県警と地域金融機関と連携して、地域のお年寄りへの防犯啓蒙活動に取り組むことにより、被害者減少を目指すプロジェクト「Guardian」として活動する。	8名

( ) 内は単位化された学生の人数

等と直接連携したプロジェクトが10件、地域社会への還元を目指した調査や、イベントの開催、冊子等の作成が4件見られる。

#### 4-2 平成24年度のサーブिस・ラーニング

平成24年度は、7名の教員による9つの活動が実施されている。参加学生の延べ人数は97名

である。活動の中には、地域社会と直接連携したものが6件、成果物を地域に還元することを目的としたものが3件見られた。

平成24年度に実施された活動の中には、23年度より継続しているものと、前年度と同じ形式ではあるが実質的に新たに開始されたものがある。

表2 平成24年度に実施された活動内容

活動名	担当教員	地域活動の目的	学生数
日本語を母語としない児童生徒のための学習支援教室運営	安藤 淑子	地域の外国人住民を対象とした日本語教室及び外国から来た児童生徒のための学習支援教室に参加し活動を支援する。	15名 (5名)
国際理解活動を通じた地域密着型途上国支援	二宮 浩輔	山梨県をフィールドにし、地域社会と連携した国際理解、国際交流活動の試み、及び活動を通じた学生の国際理解の促進を図る。	12名
放送文化論実践	前澤 哲爾	地域映像、大学プロモーション映像の制作	13名
キャンパスキャラクタープロジェクト	前澤 哲爾	地域活動への大学キャラクターの参加及び大学間の組織の立ち上げ。	8名
観光による地域振興支援プロジェクト	吉田 均	WEBによる観光情報の発信を通じて、地域振興の方法を学生に実体験させる。	25名
外国人児童生徒のための進路進学ガイドブック作成プロジェクト	安藤 淑子	山梨県内に在住する外国人児童生徒、及びその保護者のための進路進学のためのガイドブックを多言語で作成し、閲覧のためのHPを開設する。	6名
地域金融犯罪予防活動(プロジェクトG)	澁谷 彰久	県立大生が山梨県警と地域金融機関と連携して、地域のお年寄りへの防犯啓蒙活動に取り組むことにより、被害者減少を目指すプロジェクト「Guardian」として活動するものである。	8名
地域振興機関紙「VISION」制作プロジェクトII	安達 義通	今年度は、コミュニティビジネスをテーマとし、国内、及び海外(英国)での取材を行う。得られた情報はパンフレット化し、地域社会に情報として還元する。	6名
やまなしエコジャーナルプロジェクト	箕浦 一哉	インターネット新聞「やまなしエコジャーナル」を発刊し、山梨における環境やまちづくりに関して取材・記事執筆・情報発信の活動をおこなう。	4名

( ) 内は単位化された学生の人数

サービス・ラーニングにおける地域活動は、特に本学の場合地域ニーズと密接に関連しているために、長期に渡るものがある一方で当面の目標を達成したため終了するものがあり、毎年変動が生じることはやむを得ない。この点が、一般的な大学の講義とは異なる点である。

## 5. サービス・ラーニングの評価結果

平成24年度の活動の中にはまだ実施中のものも含まれるため、ここでは平成23年度に実施されたサービス・ラーニングの評価結果を報告する。

### 5-1 学生による自己評価

活動に参加した学生は、サービス・ラーニング終了時に活動に関するリフレクションを項目別の自己評価と自由記述によって行った。

(1) サービス・ラーニングを通じて向上した能力

その結果、平成23年度に実施した活動の自己評価項目のうち、「SL活動を通じて向上した能力」について、図4のような結果が見られた。実施した活動内容によって向上した能力にはばらつき

があるものの、多くの活動において「コミュニケーション力」が向上したとの回答が多くみられる。また、「自発的に行動する力」や「運営する力」など、これまでの座学の講義では獲得が難しいと考えられる実践的・主体的な能力開発にも寄与したものと考えられる。

なお、活動によって差が見られた「課題を把握する力」「社会に対する関心」「表現する力」に関しては、実施された活動内容とも関連があるだろうが、本来はどの活動においても向上が期待される能力であり、この結果はサービス・ラーニングとしてふさわしい活動とは何かという問題提起にも繋がるだろう。

(2) サービス・ラーニング活動を行う上で重要だと感じた能力

また、「SL活動を行う上で重要だと感じた能力」については、図5のような結果が見られた。本活動を通じて、多くの学生が「コミュニケーション力」、「自発的に行動する力」、「運営する力」及び「表現する力」が重要であると感じていることが分か

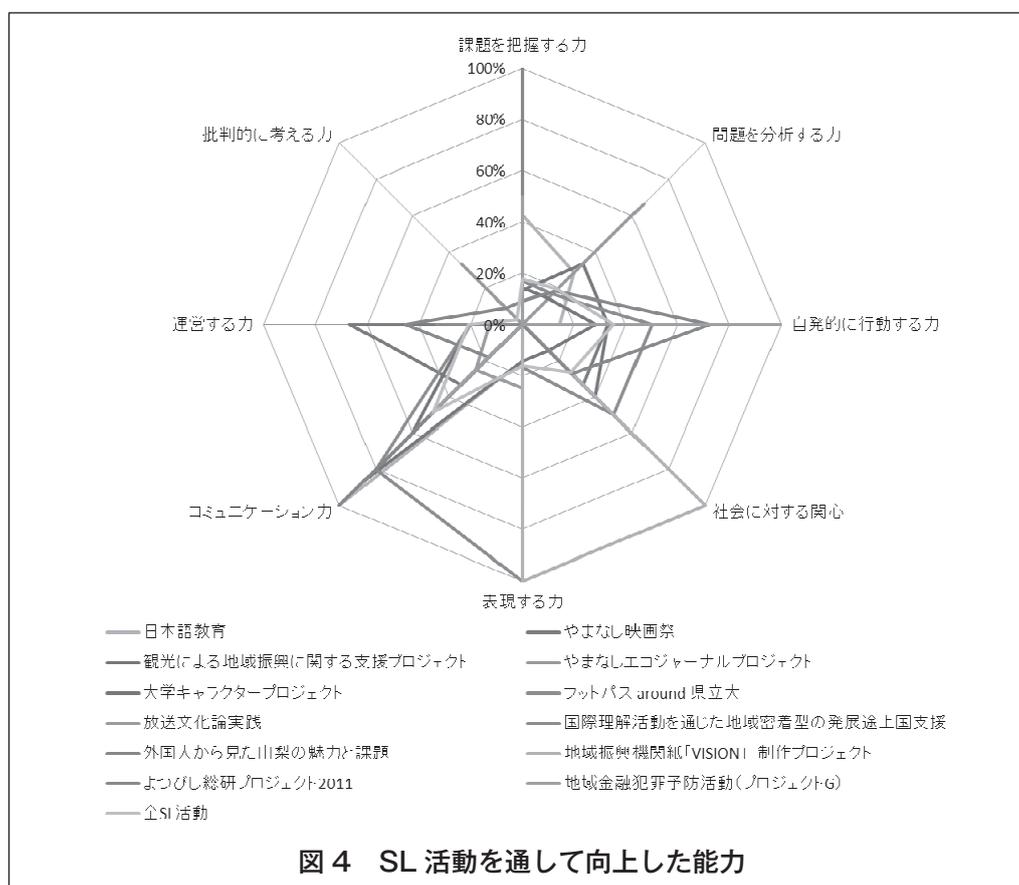
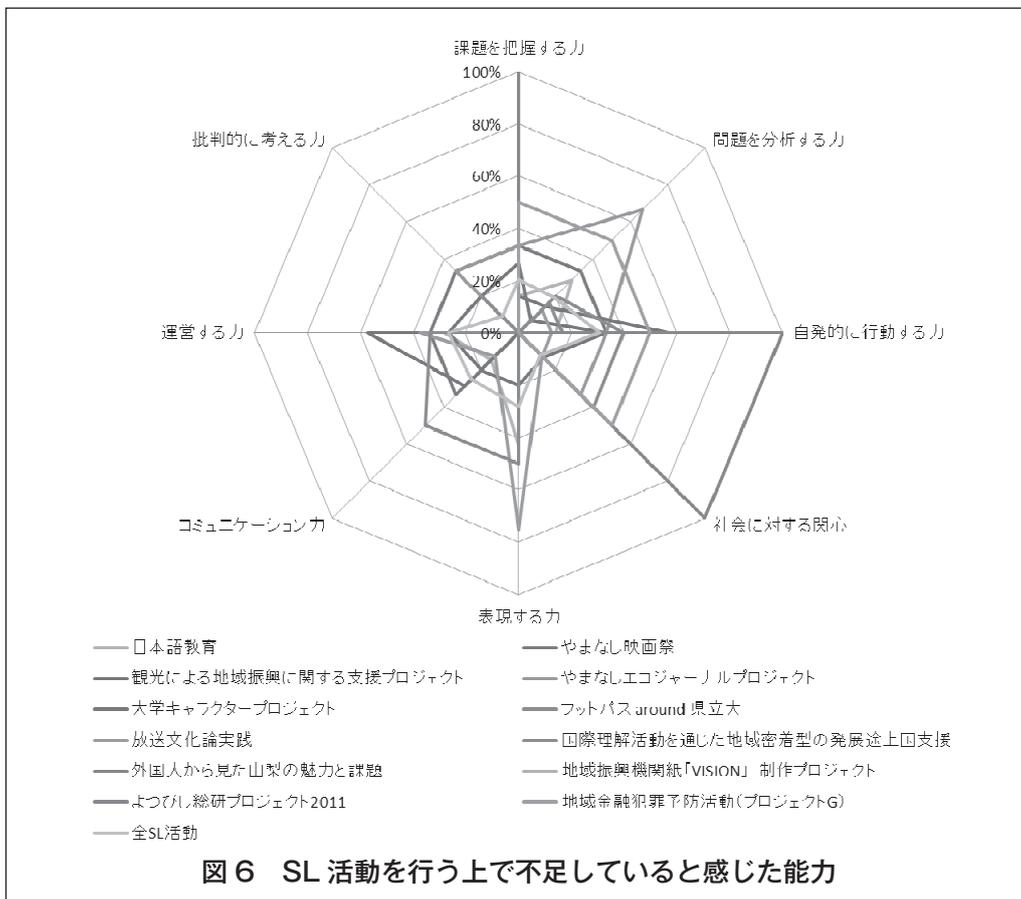
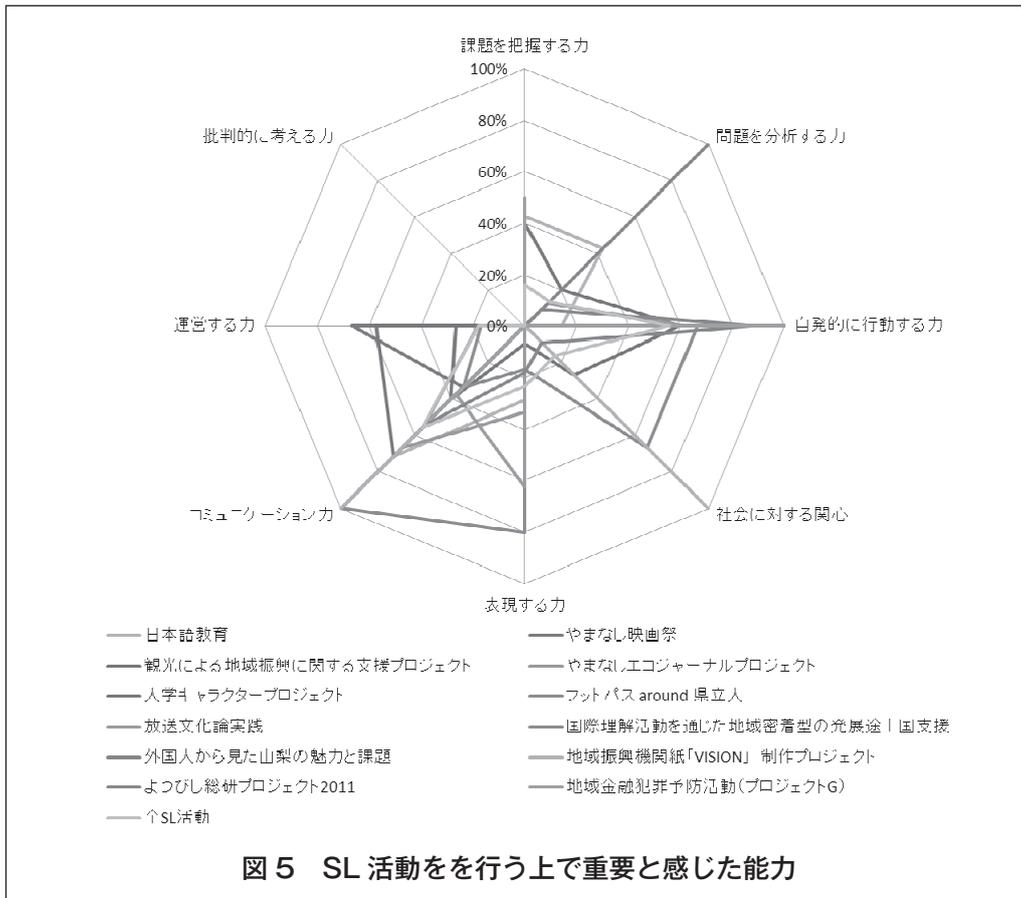


図4 SL活動を通して向上した能力



る。これは、上の「SL 活動を通じて向上した能力」と表裏一体である。それに対して、「批判的に考える力」や「課題を把握する力」と答えた学生は少数である。

これは回答方法（重要だと思われる項目を2つ選択）に原因があると考えられるが、行動面・実践面での能力については自覚的な学生も、行動の基盤となるべき思考力について意識が低い可能性がある。高等教育機関におけるサービス・ラーニングとしては、実践する力と思考力との関係性を何等かの形で学生に明示する必要があるだろう。

(3) サービス・ラーニングを行う上で不足していると感じた能力

「SL を行う上で不足していると感じた能力」については、図6のような結果が見られた。この項目も活動内容によってばらつきがあるものの、「自発的に行動する力」、「社会に対する関心」、「表現する力」、「課題を把握する力」について、学生自らの能力が不足していると感じた学生が多いことが分かる。

この問いがサービス・ラーニングを実施する前段階を指すのか、実施過程を指すのか不明確であった点は反省すべきであるが、「課題を把握」し、「自発的に行動」すること、その前提としての「社会に対する関心」を持つというサービス・ラーニングの「サービス」の部分により深く関連する項目が上がっている点に着目すべきだろう。全体を通して言えることは、学生が多く項目で挙げた「コミュニケーション力」というものが何を意味しているのかということである。

たとえば、次に挙げるように、自分の持っている知識や情報を十分な形で相手に伝えることができなかつたと記述する学生が複数見られた。他者に伝えるという経験を通して、自分の知識の不確かさを認識したということなのだろうが、実際、どのような場合でも受け売りのままの知識は本当の意味での「知識」とは言えず、それを自らの

内面で再構築することで、初めて真の意味での「知識」となることを体験的に知ったということだろう。

- ・日本語の特徴を理解できておらず、学習者がわかるように説明できない。(学生 A)
- ・正確に答えることを意識しすぎて、学習者の疑問に答えることができない。(学生 B)
- ・授業のテンポが悪かったり、言葉の言い回しがあいまいになってしまうなど、改善しなければならないことが多いと実感した。(学生 C)

これは、Kolb(1984) のような経験型学習のモデル(図7) からも言えることであるが、実践において学生は自らの知識を実践に合わせた形式に再構築し、これに実践と内省を通して得られた知識を加えた上で再度知識を内面化するという、一連の過程が繰り返される。

このように実践経験によって学習は強化され、獲得された知識が血肉のあるものとして定着するという側面に、経験型学習の意義が存在すると言えるだろう。

こうした点を踏まえて、今後どのような専門領域の学習にサービス・ラーニングがよりふさわし

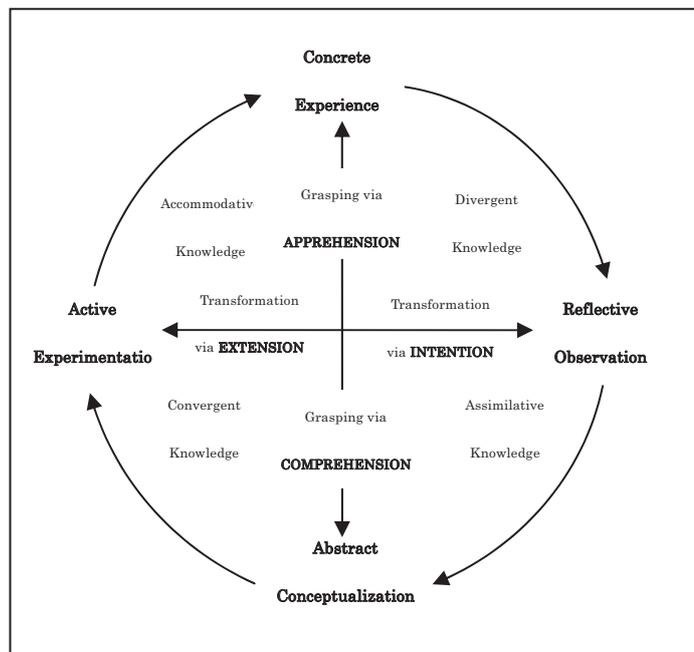


図7 Structural Dimensions Underlying the Process of Experiential Learning and the Resulting Basic Knowledge Forms (Kolb, 1984, p.42)

いかを検討することも、今後の運営における課題である。

次に挙げるのは、それぞれの項目に該当する学生の自由記述の内容である。特に重要な点は、活動を通して学生が社会の一員としての手ごたえを感じたという点にある。「専門教育と連動した実

践的な学び」という教育目的の背景には、サービス・ラーニングの「サービス」の部分が持つ社会への学びが、言葉を換えれば自分自身の中にある社会性の自覚が学生の人間としての成長を支え、能力を発展的に育成する基礎力となることが期待される。

■「コミュニケーション力」に関する学生の回答

- 外国人学校の方々と触れ合い、その実態を知ることで、日本の社会的問題にも触れることが出来ました。在日外国人の方に対する意識などにも大きな変化がありました。【遠隔日本語教育】
- 今回の活動は地域振興における若者参画の第一歩だと考えます。私たちが行った活動が、今後もっと広がっていき、地域に今ある魅力を発信していけたら良いと思います。実際に自分の足で歩き、見て、地域の人と会話すること。地域振興に欠かせない重要なポイントだと感じました。【フットパス around 県立大】
- 大人の方々との交流の場もあり、とても充実した時間を過ごせました。今までは学生のみ人間関係でしたが、今回ボランティアとして働いたことでもっと広がった気がします。【やまなし映画祭】
- 本活動を通じて、自分の役割を認識するだけでなく、他者の意見に耳を傾ける大切さ、地域社会の一員としての自覚を持たなければならないと感じることができた。自身において貴重な経験ができたと思う。【地域金融犯罪予防活動（プロジェクトG）】

■「自発的に行動する力」に関する学生の回答

- 自発的に行動する・意見を述べる点について課題があると強く感じた。人の意見に合わせて行動するばかりではなく、私自身の意見を述べることも、活動をいい方向に向かわせることにつながることに気づくことができた。【大学キャラクタープロジェクト】

■「運営する力」に関する学生の回答

- 半年に渡って、ミーティングを進めることの難しさ、業者に発注することの難しさ、企画の難しさと、さまざまな壁を体験することができました。初めて行うことが多かったので戸惑うことがほとんどでしたが、徐々に改善されていくのが自分たちにもわかり、やりがいを感じていくようになっていきました。【国際理解活動を通じた地域密着型の発展途上国支援】
- 「ふらっと案内」の編集に関わることにより、イベントを作り上げるためには沢山の人が関わっていることを改めて感じた。【観光による地域振興に関する支援プロジェクト】
- 本活動では下級生の指導を含め、マネジメントについて主に学ぶことができました。組織運営の難化と方法については実体験を通して学ぶことができたので自分にとって大きなプラスとなりました。【よつびし総研プロジェクト2011】

■「表現する力」に関する学生の回答

- マックを利用した映像編集のスキルを身につけられたことは、今後の活動のプロデュースや広報に大いに役立つと思うので、本授業で得られたものは大きかったと個人的に感じています。【放送文化論実践】
- 今年度のゼミでたくさんのことを学んだ。将来観光業に就きたいので、今回の経験をもとに、それを実践できるようになりたいと思った。【地域振興機関紙「VISION」制作プロジェクト】

■「社会に対する関心」に関する回答

- 自分の存在が確かに相手の役に立っているのだということを、日本語教育を通じて実感しました。日本語教師とは単に日本語を教えるだけでなく、日本と異文化を結びつけ不安を緩和させる重厚な職であるのだと、実際に活動してみて強く感じました。【学習支援教室】
- 社会的な観点から、外国人を取り巻く環境について、現状や政策、取り組みなどについて知っておく必要があると感じた。【日本語・日本文化講座】
- 環境という視野を持ちながら情報を発信していくことに視点を置き、様々な事を学びました。また、人数も少人数で議論しやすい場でした。今後もこの活動が継続されると良いと思います。【やまなしエコジャーナルプロジェクト】

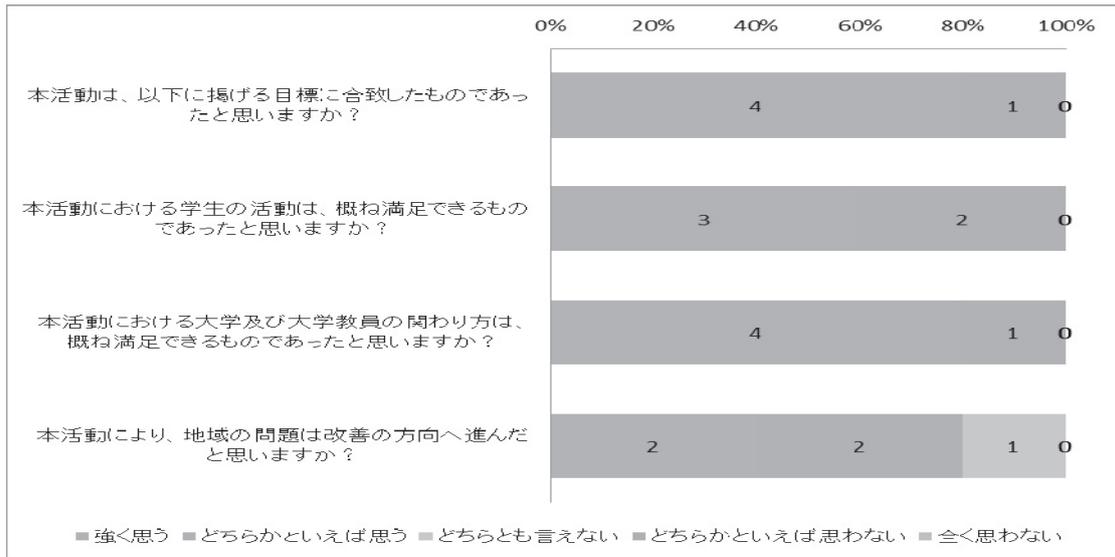


図8 サービス・ラーニングに対する地域の評価

### 5-2 地域の評価

次に、本活動の連携先となる地域の団体等からの評価は、14件の活動のうち、6件について実施された。回答があった地域からの評価結果は下図(図8)の通りである。地域からは、活動の地域社会に対する意義や活動方法については、ほぼ理解や満足が得られていると考えてよいだろう。

### 5-3 担当教員による評価

本活動の担当教員による評価は図(図9)に示す通りである。

結果として、地域課題に即した活動や学生に対する教育的効果、また活動の円滑な実施については、概ね出来たという回答が多くみられる。その一方で、講義で学んだ知識の活用や活動過程の意義に対する対処、学生の活動記録の保管については「どちらかと言えばできなかった」という回答が多く見られた。これは、たとえば学習支援教室の運営のように定期的な活動の場合と、最終的な成果物に向けた過程の期間の長いものとの相違によるものである。基本的にサービス・ラーニングにおける学生への評価は総合的なものであり、活動の多様性を踏まえた記録の保存方法について検討が必要だろう。

また、「リフレクションの実施」については、どちらとも言えないという回答が多く見られたが、これは各教員において「リフレクション」の

持つ意味の認識が一定ではない点に問題があると考えられる。実際には、学生による自己評価シートへの記入がリフレクションの土台となっているのであるが、このことの教育上の意義に関する理解が不足しているとすれば、今後の運営上の重要な課題であると言わざるを得ないだろう。

一方、サービス・ラーニングを通して学生のどのような能力が高まったかという点に対する教員の評価は、「自発的に行動する力」や「社会に対する関心」、「コミュニケーション力」の項目を指摘する回答が比較的多くみられたのに対し、「批判的に考える力」、「問題を分析する力」、「課題を把握する力」についての回答は見られなかった。これは、先の学生の自己評価とも一致している。ここにはおそらく活動の実施という実践方面に関する指導に力が注がれる反面、その背景となる思考力の育成という側面にまでは踏み込めていないという内省があるのだろう。

## 6. 専門教育との関連性

以上の平成23年度に実施されたSL事業の評価に加え、今後の本学におけるSL活動の正規科目化に向けた基礎データとして、各SL活動の科目上の位置づけと、活動の成果が寄与すると考えられる他の科目との連携について、担当した教員へのアンケート調査を行った。その結果を図(図10)に示す。

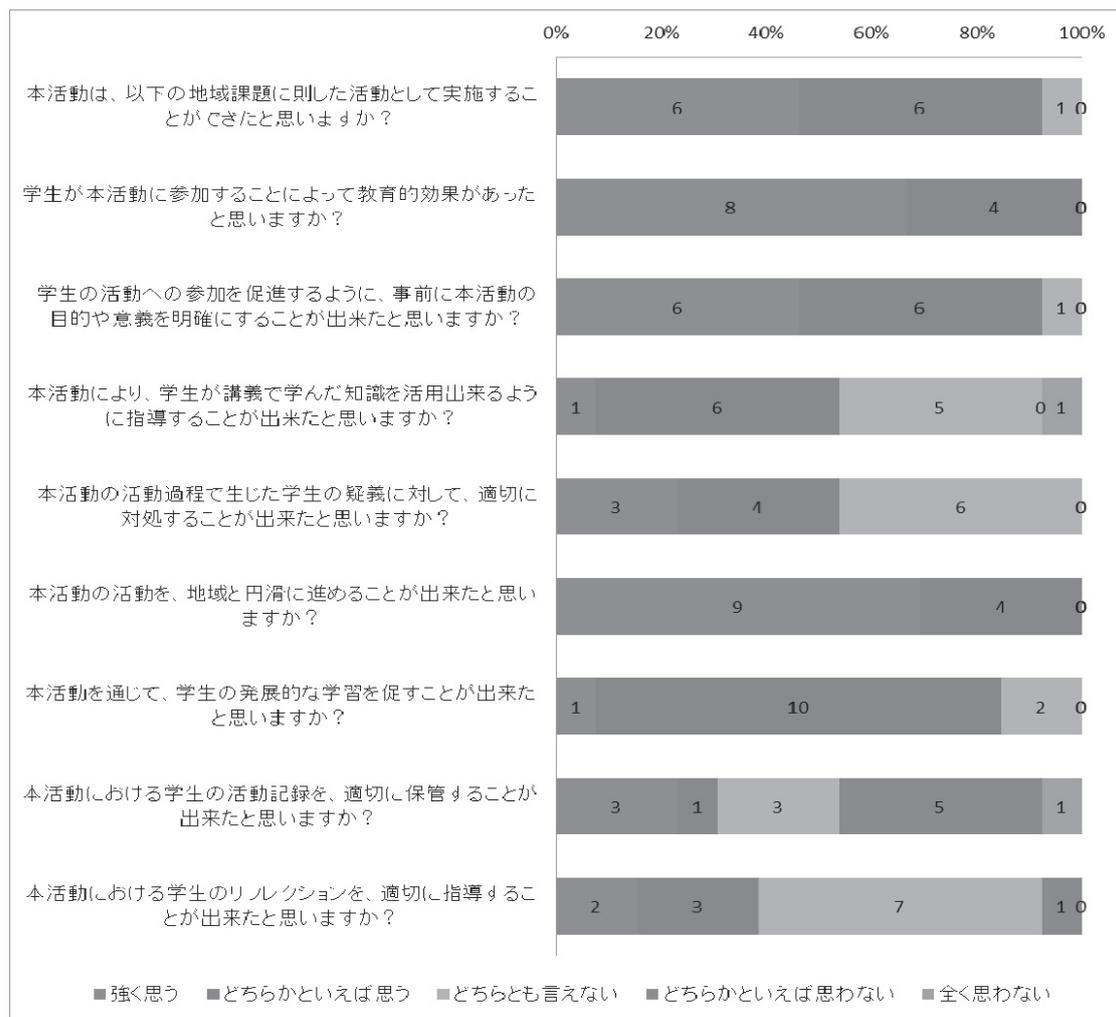


図9 サービス・ラーニングに関する担当教員の評価

回答結果から、サービス・ラーニングを履修した学生にとって新たな学習に発展することが期待される専門科目の分野は、以下の二つの領域に渡ると考えられる。

(1) 学科別専門科目への展開

サービス・ラーニングは、学生の専門科目に対する興味・関心や理解の深化などにつながる可能性がある<sup>3)</sup>。実際、サービス・ラーニングに参加した学生の自己評価の中には、実践において自らの力不足を自覚し、今後の具体的な学習目標を挙げる記述が見られた。

このことは、サービス・ラーニングと専門領域の学習との相補的な関係を示すのみならず、大学における専門学習全般への意欲や動機付けという観点から、サービス・ラーニングの意義を示すものであると考える。

(2) 演習科目・卒業研究への展開

サービス・ラーニングの延長として、演習科目（ゼミ）における学習や卒業研究のテーマなどへ発展することが期待される。

実際に、サービス・ラーニングで行った地域活動を卒業研究のテーマに選択する学生は少なからず存在しており、活動を通じて知り得た知識や具体的な現状を基礎に、独自の観点からさらに学習を拡大深化することが期待できる。

7. まとめと今後の課題

本学国際政策学部におけるサービス・ラーニングは、学部の専門教育の活性化と、地域課題に対応した大学・地域の連携を促進するという目的を有している。したがって、実施される地域活動は、専門教育で学んだ知識を実践的に活用できるもの

本活動が該当する科目分野(想定を含む)		配当年次		本活動のフィードバックが想定される科目分野			
共通	学部教養科目	1・2・(3)		学部教養科目	共通		
	導入科目	1・2		導入科目			
	総合政策基礎科目	1・2・3		総合政策基礎科目			
	総合政策展開科目	国際分野	2・3・4		国際分野	総合政策展開科目	
		地域政策分野	2・3・4		地域政策分野		
		組織経営分野	2・3・4		組織経営分野		
		共通(総合政策特講)	3・4		共通(総合政策特講)		
	総合政策実践演習科目	2・3・4		総合政策実践演習科目			
	関連科目	1・2・3・4		関連科目			
	外国語	英語	1・2・3・4		英語	外国語	
中国語		1・2・3・4		中国語			
自由科目	-		自由科目				
国際コミュニケーション学科	導入科目	1・2		導入科目	国際コミュニケーション学科		
	国際コミュニケーション基礎科目	1・2・(3・4)		国際コミュニケーション基礎科目			
	国際コミュニケーション基幹科目	国際関係分野	2・3・4			国際関係分野	
		地域理解・地域文化分野	2・3・4			地域理解・地域文化分野	
		言語・コミュニケーション分野	2・3・4			言語・コミュニケーション分野	
	国際コミュニケーション演習科目	(2)・3・4		国際コミュニケーション演習科目			
	関連科目	社会科学系	1・2・3・4			社会科学系	関連科目
		人文科学系	1・2・3・4			人文科学系	
	外国語	英語	1・2・3・4			英語	外国語
		中国語	1・2・3・4			中国語	
自由科目	-		自由科目				
その他	-		その他				

図10 サービス・ラーニングと学部専門教育との関連性について

であると同時に、地域社会のニーズに応えるものでなければならない。

平成23年度、24年度の実施によって明らかになったサービス・ラーニングの教育的効果は、次の通りである。

- (1) コミュニケーション能力や自発性といった、座学では得られない実践的な能力の伸長が見られた。
- (2) 地域社会の人々と協働することによって、地域の課題に対する具体的な視点と、社会に対する関心が生まれた。
- (3) 地域活動に関連する専門領域の学習に対し発展的なフィードバックが見られた。

地域活動の実践における既有知識の運用と活動後のリフレクションによって、学生は自らの学習課題に気づくとともに、新たな領域へ自身の興味の範囲を拡張している。このことから、サービス・ラーニングは専門学習を発展させると同時に、大学における学習全般をより主体的なものへと変容させる原動力となり得ると言えるだろう。

地域社会に関しては、今回のサービス・ラーニングを通して大学は地域と新たな関係性を持つことになった。これによって活動への若い人材の参入という副産物が生じるとともに、地域社会の抱える様々な課題改善のため、大学教育との連携という新たな選択肢が増えたと言えるだろう。一方で、地域ニーズを重視するサービス・ラーニングは、活動形態を固定化することが難しいという課題を持っている。教育目的と地域ニーズとの関係は、今後十分な検討が必要だろう。

なお、今回の実施によって、サービス・ラーニングの持つ教育的効果が示されるとともに、カリキュラム化に向けてさらに改善の必要な点が見明らかになった。それは、教員間にサービス・ラーニングそのものの共通理念が十分共有されていないという点である。

専門教育と連動した地域活動が学生教育として効果を上げる一方、教員の関心が個別の教育活動に集中するため、場合によっては成果を重視するあまりリフレクションに対する意識が低いケース

も見られた。今後は、ガイドラインへの理解をさらに浸透させるための取り組みが必要になるだろう。

最後に、平成 22 年度から今日までの実施経験を踏まえて、今後は学部専門教育のカリキュラム内にサービス・ラーニングを体系的に位置づけ、運営のための体制作りを行うこととなる。学生－大学－地域という三者の有機的な関わりを通して、公立大学としての新たな教育モデルを構築することが、本学の目指す目標である。

## 注

- 1) 本事業は、文部科学省平成 22 年度大学教育・学生支援推進事業「課題対応型 SL による公立大学新教育モデル～サービス・ラーニング (SL) を活用した大学の地域貢献と学生教育の質の向上～」として採択された。
- 2) これは、地方都市に立地する公立大学という大学の設置形態とも密接な関連がある。本学は開学以来、学内に設置された「地域研究交流センター」を中心に、教員による地域の調査研究を含めた多様なプロジェクトを実施している。前述したプロジェクトはこの中に含まれている。
- 3) サービス・ラーニングが、活動と直接関連する領域以外の専門学習にも連動するケースが見られる。例えば、「日本語教育」に関連するサービス・ラーニングにおいては、外国人労働者や移民問題等の国際関係・政策論、或いは外国人の子どもたちに対する学校教育の問題に関心を抱く者が生まれ、学習の裾野が広がっている。

## 参考文献

- (1) 安藤淑子 (2011) 「日本語教員養成課程におけるサービス・ラーニングのカリキュラム化に関する研究～WEB による活動ログ管理と指導の体系化に向けて～」平成 23 年度日本語教育学会全国大会予稿集
- (2) 倉本哲男 (2008) 『アメリカにおけるカリキュラムマネジメントの研究 サービス・ラーニングの視点から』ふくろう出版
- (3) 佐々木正道 (2003) 「アメリカの大学におけるサービス・ラーニング」『大学とボランティアに関する実証的研究』(佐々木正道編) ミネルヴァ書房
- (4) 中央教育審議会大学分科会大学教育部会 (2012) 「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」平成 24 年 3 月 26 日 文部科学省
- (5) 津止正敏・桜井政成 (2009) 「学校教育とボランティア活動を巡って」『ボランティア教育の新地平 サービス

ビスラーニングの原理と実践』ミネルヴァ書房

- (6) Kolb. D., 1984, “*Experience as the source of leaning and development*”, Prentice Hall.
- (7) National Service-Learning Clearinghouse  
[http://www.servicelearning.org/what-is-service-learning\(2011/12/29\)](http://www.servicelearning.org/what-is-service-learning(2011/12/29))
- (8) Seifer SD., Connors .K. Eds., 2007, “*Faculty Toolkit for Service-Learning in Higher Education*” Learn and Serve America’s National Service-Learning Clearinghouse.